

真の世界平和を目指して

学校法人長崎南山学園長崎南山高等学校 1年 高田 健士郎

私たちは今、時代の過渡期を過ごしている。先進国では少子高齢化が進み、発展途上国では人口増加、経済発展が目覚ましい。世界中が競争社会になっていく中、ロシアがウクライナに戦争を仕掛けた。そういった今だからこそ、私は現在戦争や紛争に巻き込まれている人を含む全世界の人々が、もっと真剣に過去の歴史から学び、自分なりの平和を考える力を養う必要があると考える。

私は十六年間、被爆地長崎で生まれ育ってきた。幼い頃から原子爆弾の被害について学んでおり、戦争中の映像、現在でも苦しんでいる人を見て、「なんで日本が、長崎がこんな被害に」と、ずっと思っていた。今年度から高校生になった私は、一万人署名活動や高校生平和大使の案内をより多く見かけようになり、長崎からの平和活動が全国、世界に広まり、関心を抱く人々が増えていると感じていた。そんな中、今年の七月の始め、私の通っている長崎南山高校と姉妹校提携している韓国の高校の生徒が来日し、数日間生活した。衣食住を共にしたことで、日本と韓国の様々な違いを学ぶことができた。最も印象深かったのは原爆資料館を訪れた時だ。長崎に原爆が落ちたことすら知らなかった韓国の生徒はその被害や傷跡を見るたび驚いて「これはなに？ どうして？」と聞いてきて、ただ茫然と立ちつくしていた。人々の原爆に対する関心が高まってきたと感じていた私には大きな衝撃だった。そんな私の反応を見て、彼は韓国が第二次世界大戦中に受けていた被害について教えてくれた。その加害国は日本だった。日本は一九一〇年から一九四五年に戦争が終わるまで韓国を侵略していた。この間の時代を韓国では「日本による植民地時代」と呼んでいるそうで、性的暴行や人権侵害が続いていた。日本が降伏した日は、同時に大韓民国が設立された日であり、韓国人はこの日を「光復節」と呼ん

でいて、平和の象徴だと考えられており、国民の祝日になっているとのことだった。それを聞き、私は平和学習という名の下で、日本が受けた被害だけを学び、日本が加害国だったことは考えたことさえないことに気が付いた。つまり、いかに自分が狭い視野で平和に対して考えてきたか、自分の無知さを痛感した。そうして本当の意味での平和とは、様々な視点からよく考えた上で互いの考えを受け入れ、思いやることだと思った。

私の今の夢は世界中で起こっている争いや紛争を実際に自分の目で見て、それを伝えることで「本当の平和」の輪を全世界に広げていく国際ジャーナリストになることだ。争いが起こる最も大きな原因は互いの正義がぶつかり合うことであるが、その「正義」の定義は人や場所によって異なる。平和を実現するためには、相手の「正義」を知る必要がある。争いが起こる前に、様々な過去から自分の「正義」と他者の「正義」が違うことを学ぶ必要があり、その違いを認め、思いやる必要があると確信している。現在私たちは地球上で約八十億人もの住民と一緒に暮らしており、インターネットのおかげでその距離は近い。だからこそ、現在戦争中にある人々も含め、全世界の人々が、過去から学び、自分なりに平和を考えていくことができる力を未来に繋げていくことが大切だと思う。私は来年一月から一年間オーストラリアに留学する。オーストラリアにも戦争中、日本から空襲攻撃を受け、占領されそうになったという事実がある。そこで生活するという事は、昔悪者であった日本人の影と出会うチャンスになると考えている。その中で現地の人の平和に対する価値観や日本に対するイメージを学びながら、十六年間培ってきた自分ならではの平和に対する考え方を知ってもらい、平和な世界に向けて相互理解を深めていきたいと思っている。将来、自分が広めた平和の輪が世界中の人々が笑顔で暮らせるような世の中へとつながっていくと信じている。